犯罪における共感性尺度の作成

—想像力の下位概念として共感性の検討—

○ 中妻拓也¹ 桐生正幸²

(¹ 関西国際大学大学院人間行動学研究科 ² 関西国際大学人間科学部)

キーワード: 共感性・共感性尺度・世代差

The Development of empathy scale in the crime

○ Takuya Nakatsuma¹, Masayuki KIRIU²

(Kansai University Of International Studies graduate school of human behavior science¹, Kansai University Of International Studies Human Sciences²)

Key words: empathy, empathy scale, generation difference

我々は日々、何かしらの形で他者と関わっている。その関わりを円滑に進める能力のひとつとして「想像力」があると考えられる。

「想像」は「象徴を創出・操作する能力に基づいており、直接的な感覚認識では捉えきれない可能性について考える心的能力」

(Person, 1995) と定義されており、「想像力」は「想像する能力」と考えられる。この「想像力」は、様々な下位尺度からなる複合的な概念と仮定される。「想像力」の異常はコミュニケーション様相に影響を与え、極端な場合には犯罪、非行に結びつく可能性も考えられる。

そこで今回は、「想像力」の中でも主要な要因のひとつと考えられる「共感性」に着目し、共感性尺度を用いて、中学生、高校生、大学生、社会人の共感性の相違を明らかにし、今後、犯罪と想像力との関連を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

この「共感性」は、「他者の経験についてある個人がいくつ反応を扱う一組の構成概念」(Davis, 1994) と定義づけられている。また、「共感性」はカウンセリングの場面において、なぜそのように感じるのか理解しきれぬ「共感の欠如」やクライエントが感じたであろう感情を想像し過ぎて、カウンセラー自身が「共感のコントロール喪失」となることがあるとされている。この考え方を犯罪事象に置き換えて考えると、①「共感性」の低下によって相手の感情や痛みが想像しにくくなり、そのため犯罪や逸脱行動に対して寛容になる、②「共感性」のコントロール喪失によって自分の想像や考えに支配され他者との関係性が認識できなくなり、犯罪を起こしてしまう、③他者に対する「共感性」の低下、自身の「共感性」のコントロール喪失が犯行の凶悪化を促進させる、との仮説が立てられる。

方 法

調査対象者：A市立中学生 187 名（男性：105 名、女性：82 名、平均年齢=13.51, *SD*=1.07）、H県立高校生 85 名（男性：41 名、女性 44 名、平均年齢=16.45, *SD*=1.13）、K大学生 159 名（男性：102 名、女性：57 名、平均年齢=18.86, *SD*=3.55）、O 保育園の園児の保護者 110 名（男性：13 名、女性：97 名、平均年齢=35.58, *SD*=5.39）、O 保育園の保育士、職員 27 名（男性：4 名、女性：23 名、平均年齢=37.48, *SD*=18.83）である。今回は便宜上、O 保育園の園児の保護者、保育士、職員を社会人とし分析した。

調査内容：先行研究（中妻・板山・桐生, 2009）による質問紙（16 項目）にて、4 件法（1.まったくあてはまらない〜4.とてもよくあてはまる）を用いたアンケート調査を行った。

結 果

共感性尺度 16 項目に対し、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。共通性 30 以下の 6 項目を削除し、再度分析を行った。固有値 1.00 以上を採択した結果、3 因子が抽出された（table1）。第 1 因子を「被影響性認識」、第 2 因子を「対象共感意識」、第 3 因子を「内的空想性」とそれぞれ命名し、分析を進めるために各因子の項目の得点を加算平均した「簡便的因子得点」を算出した。

table1 本調査因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子
情報に振り回されるほうだ	.68	-.05	.07
つい、周りの人と行動を合わせてしまう	.65	-.03	-.07
自分の考えは周りの人の影響を受けやすい	.62	-.01	-.07
周りの人がそうだとさえ、自分もそうだと思えてくる	.55	-.02	.10
思い込みが激しいほうだと思う	.50	.20	-.02
その人の立場に立ってみようというもする	-.05	.89	-.05
相手と同じ立場に立ったら、どう感じるかを考えてしまう	-.02	.65	.03
幸せでない人の気持ちを思いやるのがよくある	.10	.49	.06
ストーリーの続きをついつい考えてしまう	.01	.00	.66
映画やアニメのストーリーにすぐのめりこめる	-.03	.03	.63
因子間相関	1.00	.31	.47
		1.00	.37
			1.00
α	.74	.72	.59

第1因子:被影響性、第2因子:対人共感意識、第3因子:内的空想性

各因子における世代（中・高・大・社）、性別（男・女）の相違を検討するため、世代（中・高・大・社）×性別（男・女）の 2 要因分散分析を行った。まず、第 1 因子では、世代に主効果が認められた（ $F(1, 560) = 5.40, p < .01$ ）。*Tukey* 法による多重比較の結果、大学 > 社会 = 高校 = 中学の順に得点が高かった。なお、交互作用は認められなかった。次に、第 2 因子では、世代、性別において主効果が認められた（世代: $F(3, 560) = 22.80, p < .01$ 、性別: $(1, 560) = 12.854, p < .01$ ）。*Tukey* 法による多重比較の結果、社会 = 大学 > 高校 > 中学の順に得点が高かった。また、男子より女性の因子得点が高かった。なお、交互作用は認められなかった。最後に第 3 因子では、世代、性別において主効果が認められた。（世代 $F(3, 560) = 4.326, p < .01$ 、性別: $(1, 560) = 4.370, p < .05$ ）。*Tukey* 法による多重比較の結果、大学 > 高校、大学 > 社会にのみ差があった。また、女性より男性の因子得点が高かった。なお、交互作用は認められなかった。

考 察

以上、「被影響性認識」は、他の世代に比べ、大学生が他者や情報から影響を受けているということが示唆された。これは、中学、高校の頃の校則や親の監督の目から、大学に入ることによって解放され、自由になるため、校則や親の監督下という枠組み内でできていた自己像や判断基準に迷いが生じ、また社会人のように環境に合った自己像や判断基準が築けていないため、他者や情報から影響を受けやすくなっているのではないかと考察される。「対象共感意識」は、世代が上がるにつれて上昇し、大学生以降は安定している。これは、高校までの「他者のことを考えて行動する」という人間関係の意識が残っており、大学、社会人でも人間関係に必要な考えであったため、大学生以降も安定して残っているのではないかと考えられる。「内的空想性」は、大学生が、高校生、社会人より得点が高くなる。これは、考え方や行動のモデルとして映画やアニメ、漫画などを活用しているのではないかと考えられる。

引用文献

- Mark H. Davis (1994) *Empathy: A Social Psychological Approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark. (マーク H.デイヴィス 菊池彰夫(訳) (1999) 共感の社会心理学—人間関係の基礎—, 川島書店, 15)
- Ethel S. Person (1995) *By Force of Fantasy : How We Make Our Lives*. London, Faber and Faber. (エセル・S・パーソン 岡昌之 (監訳) 浅尾泰 (訳) (1997) 人はなぜ空想するのか 翔泳社 65)
- 中妻拓也・板山昂・桐生正幸 (2009) 犯罪への許容や親和を捉えるための共感性尺度の作成と検討, 犯罪心理学研究 47 (特別号), 66-67